

第2章 地域の現状と環境評価

本章では、新潟市農村環境計画策定にあたり、本市の現状と課題を既存資料から調査を行いました。

この調査結果から得られた農村環境の現状と課題について記載します。

- 2.1 地域の概要
- 2.2 新潟市の現状
- 2.3 環境の評価



新潟市西区明田
～初夏の田園～

第2章 地域の現状と環境評価

2.1 地域の概要

2.1.1 地域の概要

本市は、サンフランシスコ・天津・リスボンとほぼ同じ緯度にあり、東京圏からは約250km、名古屋圏からは約350km、大阪圏からは約500kmの距離に位置しています。日本海や信濃川、阿賀野川の両大河をはじめ、ラムサール条約登録湿地である佐潟の他に、鳥屋野潟、福島潟など、多くの水辺空間と自然に恵まれ、コハクチョウの越冬数は日本一を誇ります。

江戸時代から物流拠点「新潟湊」の機能を生かして賑わいを見せていた「新潟町」は、安政5(1858)年に、アメリカ・イギリスなど5か国との修好通商条約によって、函館・横浜・神戸・長崎とともに開港5港の一つに指定され、世界に開かれた港町となります。明治22(1889)年、市政を施行以来、戦争・大火・地震などにみまわれながらも、そのつど復興を成し遂げて発展しています。平成8(1996)年には「中核市」に指定されています。

そして、平成17(2005)年、14市町村の合併により、歴史や文化財、郷土芸能、花木や豊富な食材、豊かな自然など、さまざまな面でさらに魅力を加え、本州の日本海側最大の都市として大きく飛躍し、平成19年4月には日本海側初の政令指定都市として新たなスタートを切りました。

国際空港や港湾、新幹線、高速道路網などが整備された交通拠点であると同時に、国内最大の水田面積を持つ大農業都市でもあるという、他の都市には見られない特徴を兼ね備えています。高い都市機能と自然環境とが調和し共存する「田園型政令指定都市」、それぞれの地域の力を大切にして、市民と行政が協働でまちづくりを進める「分権型政令指定都市」など、これまでにない政令指定都市を目指し、発展を続けています。

また、国際化時代を迎え豊かな自然環境がもたらす食の豊かさを強みとし、国外との交流も盛んになっています。近年は、成長著しい中国をはじめとする北東アジア諸国との多面的な交流やパートナーシップの構築を進めており、対岸交流の玄関口としてのポテンシャルが整いつつあります。



現在の新潟市



図 2-1 北東アジアと新潟の位置づけ

2.1.2 地勢

新潟市の地勢

面積 726.10 平方キロメートル

広がり 東西 42.4 キロメートル, 南北 34.9 キロメートル

位置 極東：東経 139 度 16 分 00 秒, 極西：東経 138 度 47 分 03 秒

極南：北緯 37 度 40 分 45 秒, 極北：北緯 37 度 59 分 36 秒

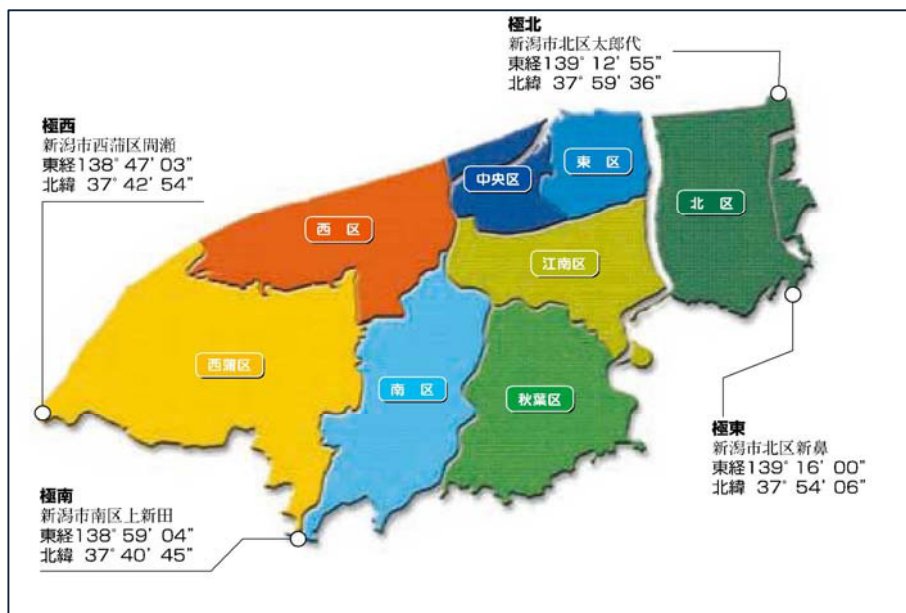


図 2-2 新潟市地勢図

2.1.3 気象

新潟県の気候は、一般的に豪雪・多雨など日本海側の気候特性が顕著ですが、本市は、県内の各地に比べて雨・雪ともに少なく、強い季節風の吹く日が多いのが特徴です。

本市中心部の海岸平野部における平年値（1971年から2000年までの30年間の平均値）は、平均気温13.5℃、年間降水量1,775.80mm、年間平均風速3.2mとなっています。4月から10月にかけては、国内の主要都市に比べ日照時間は長い方です。

夏期は、太平洋側と同様に好天が続き気温も上昇することから、高温多湿の日が多いのですが、海風で比較的しのぎやすい気候となっており、台風による気象災害も少ないです。

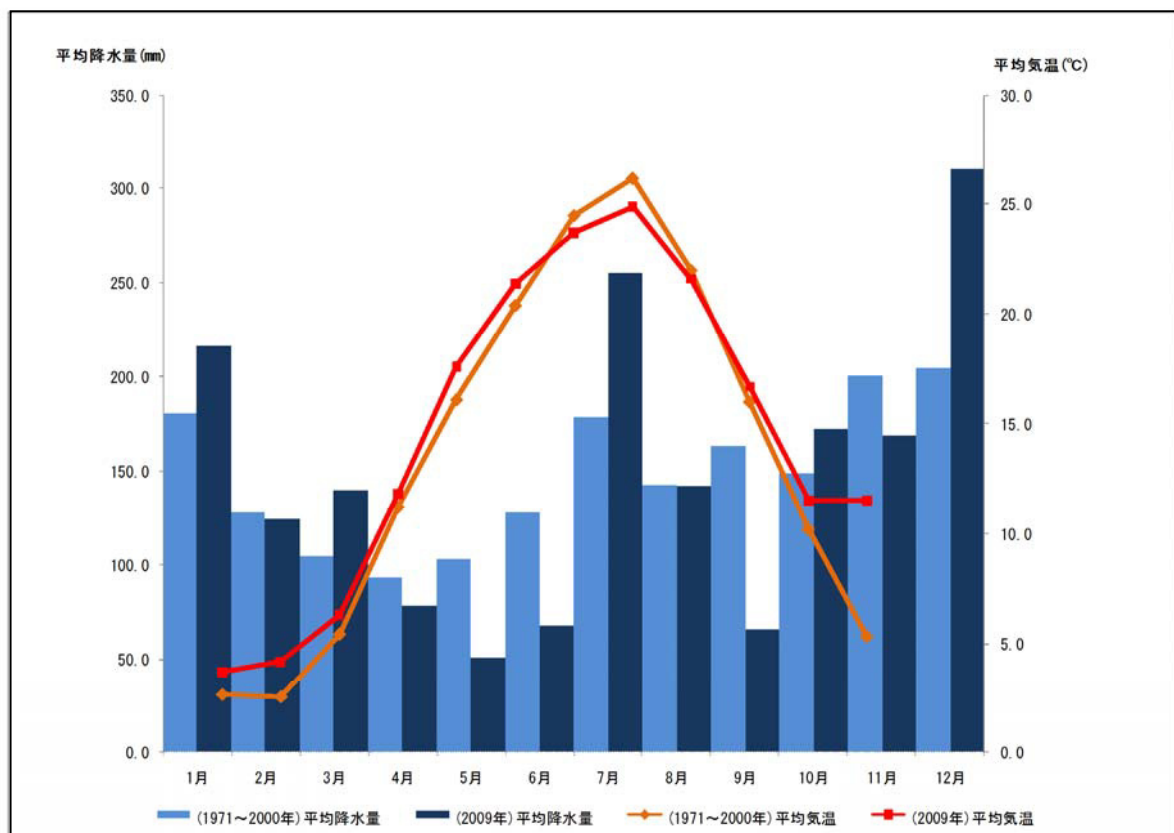


図 2-3 新潟市の気象

2.1.4 地形

本市は、越後平野のほぼ中央、信濃川、阿賀野川の河口に位置し、概ね平坦で、海岸部に連なる新潟砂丘がわずかに高台をなしています。

南東側には新津丘陵、南西側には角田、多宝、弥彦山地が、越後平野を挟むように連なっています。

市域の地質の大部分は、沖積層からなり軟弱な粘性土及び砂質土によって形成されています。

本市の特徴的な地形としては、ゼロメートル地帯(※)の範囲が広く、その面積は215.09km²で、全市の約3割に達しています。

現在では、常時機械排水されているため、通常的生活の中でゼロメートル地帯を意識することはありません。しかし、排水施設の機能停止をはじめ、近年のゲリラ豪雨・雨水流出量の増大による都市型水害に対する危機管理も問題となり、排水機能以上の降雨時には深刻な事態が懸念されます。

※【ゼロメートル地帯】

潮位が最も高くなる満潮時の平均海面よりも低い土地のこと。

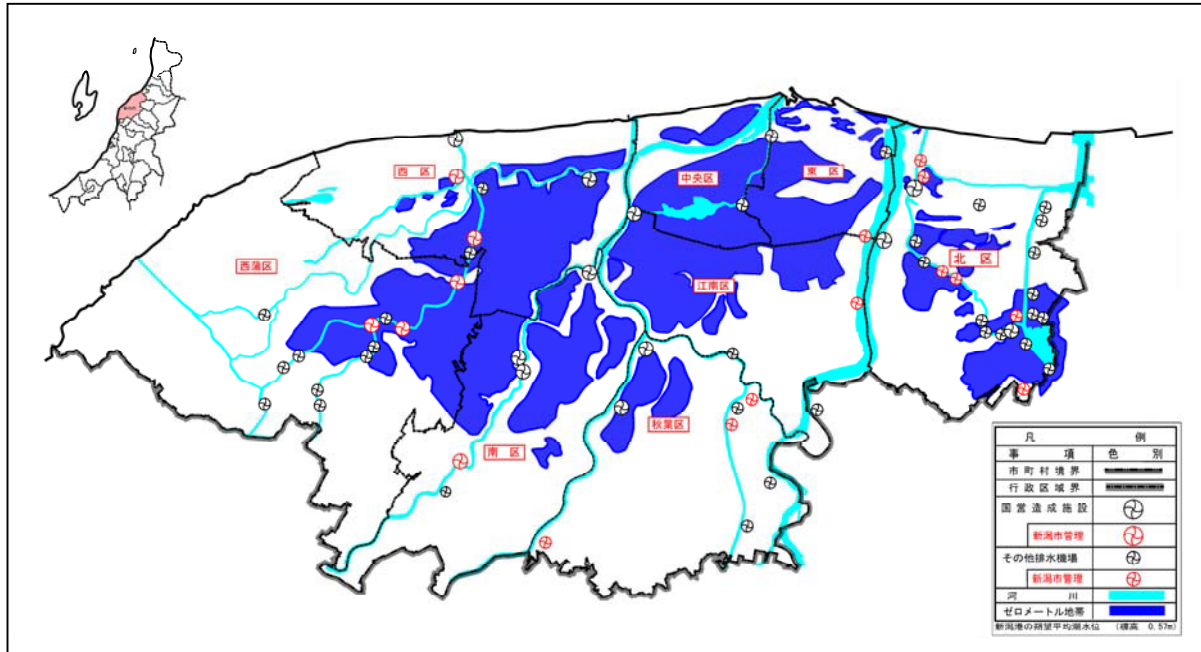


図2-4 新潟市ゼロメートル地帯分布図

表2-1 ゼロメートル地帯面積表

地区名	ゼロメートル地帯面積 (km ²)	地区面積 (km ²)	割合 (%)
新潟島	3	10	30
西蒲原	90	293	31
白根郷	25	76	33
亀田郷	70	148	47
新津郷	5	95	5
阿賀野川右岸	22	104	21
合計	215	726	30

2.1.5 動植物

本市は、日本海に面した海沿いの海岸砂丘と内陸部の沖積平野から構成される平坦な土地から成り、内陸平野部の多くは水田として利用されています。

市街化や開発、ほ場整備により、多くの希少生物の生息・生育空間が失われてきましたが、今なお希少な生物が息づく二次的自然として、また鳥類やほ乳類などの餌場として、水田は貴重な存在となっています。

市境には西に日本海に面した角田山、南に新津丘陵の山地丘陵地帯を有し、豊富な植生群落と独自の生態系を形成しています。

佐潟、鳥屋野潟、福島潟は、渡り鳥や多様な生物の生息・生育空間として、貴重な湿地生態系を築いており、信濃川、阿賀野川に代表される河川は、多くの生物の移動経路（生態系ネットワーク）を形成する要素として大切な存在となっています。



越後平野



福島潟（湖沼湿地）



角田山周辺（上堰潟公園）

(1) 植物

① 植生分布

本市は、日本海に面し、温暖帯と冷帯の境界領域にあるため、山地丘陵地帯や湖沼湿地などの自然植生を残す地域には、北方系植物・南方系植物・日本海型植物が混在する多様な植物相を形成しています。その反面、平野部の水田地帯は標高が低く一定であり、主に水田雑草群落で形成される比較的単調な植生で構成されています。

本市の植生分布を示す資料として「環境省 自然環境保全基礎調査 植生図」（第6回、第7回自然環境保全基礎調査 植生調査 環境省自然環境局 生物多様性センター）を用いて植生分布の把握と整理を行っています。

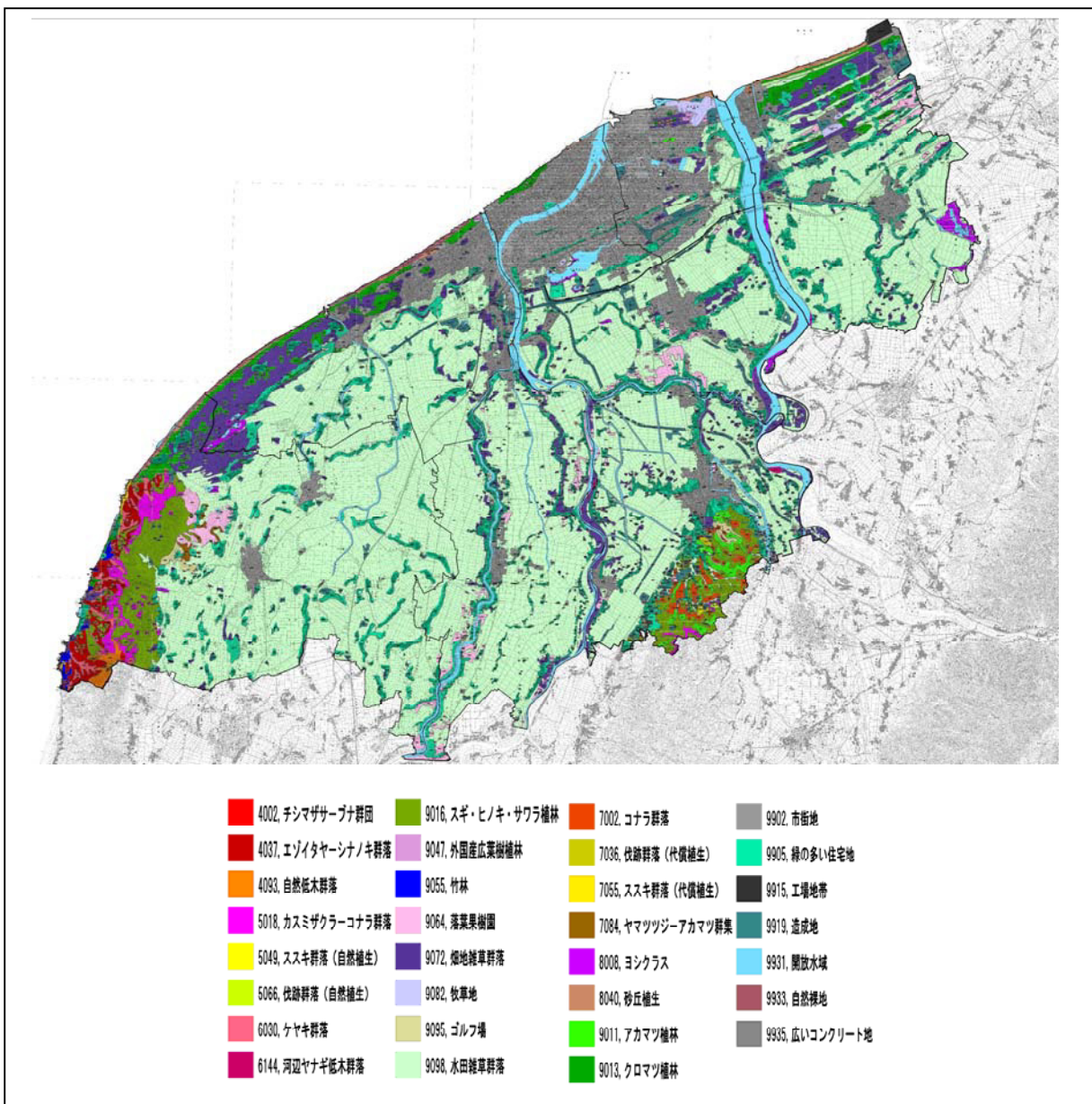


図 2-5 植生図

資料：～命のつながり新潟市プラン～
—生物多様性地域計画—

② 希少な植物

今なお多くの自然を残す角田、多宝、弥彦山、新津丘陵といった山地丘陵地帯や、佐潟、鳥屋野潟、福島潟などの湖沼には、希少な植物が数多く存在します。

平野部の水田地帯においても、生育区域が減少しつつあるなかで、希少とされている植物の生育が確認されています。

ここでは、特に保全が必要とされる貴重な植物種を抜粋して紹介します。

■平野部水田地帯

水田の畦や周辺の水路周りには希少な植物が存在します。

表 2-2 新潟市の希少植物一覧

種和名	科和名	新潟市レッドデータブック ※
アゼナ	ゴマノハグサ科	準絶滅危惧 (NT)
マツモ	マツモ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ホザキノフサモ	アリノトウグサ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
サンショウモ	サンショウモ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
サワオグルマ	キク科	準絶滅危惧 (NT)
ミズオオバコ	トチカガミ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ミズアオイ	ミズアオイ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ミクリ	ミクリ科	準絶滅危惧 (NT)
オミナエシ	オミナエシ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)



ホザキノフサモ



マツモ



ミズアオイ



オミナエシ

※【新潟市レッドデータブック】
新潟市の絶滅のおそれのある野生生物の種についてそれらの生息状況等を取りまとめたもの

■湖沼

佐潟，鳥屋野潟，福島潟に代表される湖沼（干潟）には多くの希少種が生育しています。

表 2-3 新潟市の希少植物一覧

種和名	科和名	新潟市レッドデータブック ※
オニバス	スイレン科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
サデクサ	タデ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ハンゲショウ	ドクダミ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
タコノアシ	ユキノシタ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ヒメビシ	ヒシ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
ナガエミクリ	ミクリ科	準絶滅危惧 (NT)
ノダイオウ	タデ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



オニバス



ハンゲショウ

■山地丘陵地帯

角田，多宝，弥彦山，新津丘陵などの山地丘陵地帯は独自の植生群落を形成しています。

表 2-4 新潟市の希少植物一覧

種和名	科和名	新潟市レッドデータブック ※
バシクルモン	キョウチクトウ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
ツボクサ	セリ科	地域個体群 (LP)
フクジュソウ	キンポウゲ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
ハイハマボッサ	サクラソウ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
ホクリクムヨウラン	ラン科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
トケンラン	ラン科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)



フクジュソウ



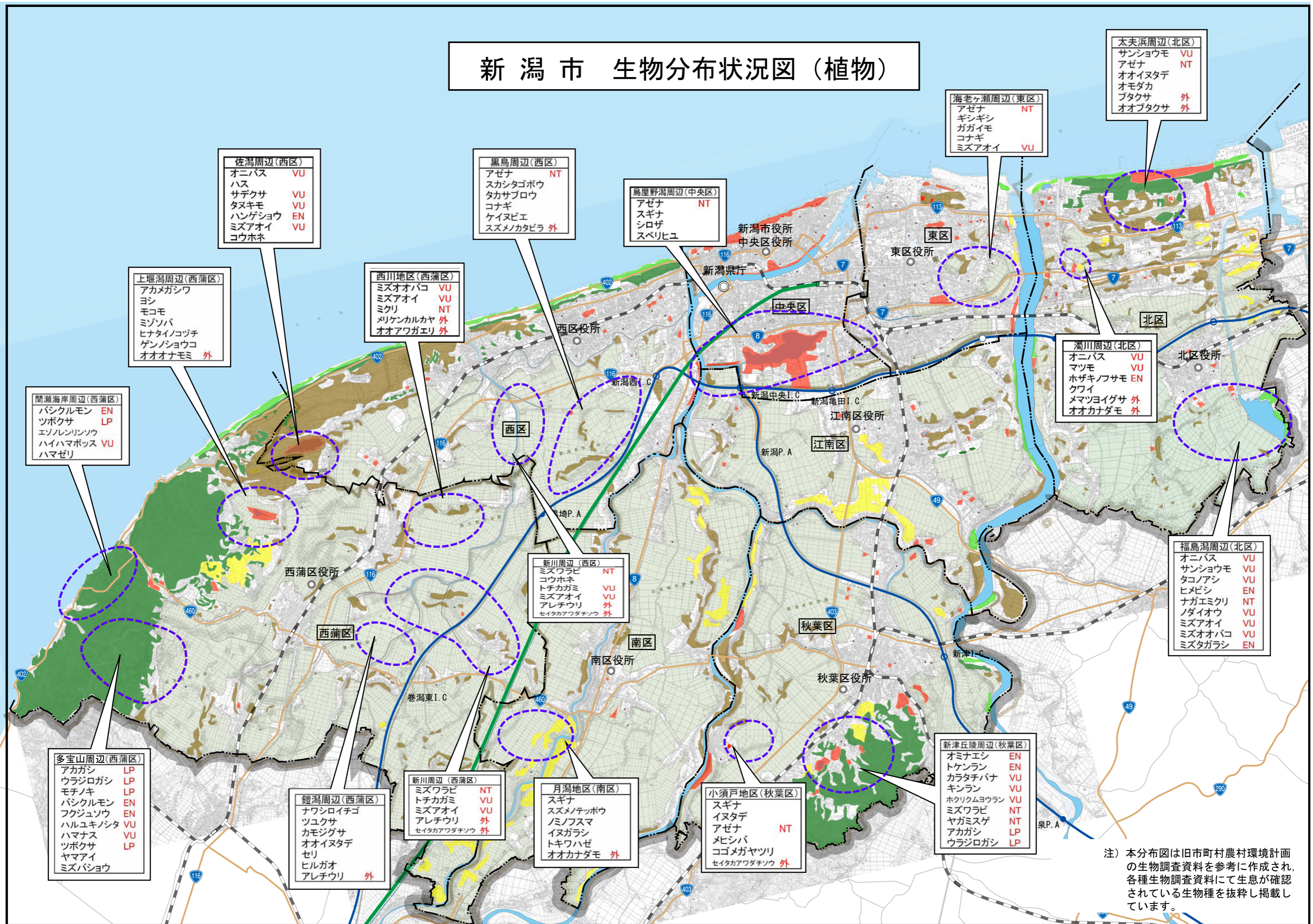
ホクリクムヨウラン



福島潟のオニバス



新潟市 生物分布状況図 (植物)



- 佐潟周辺(西区)**
- オニバス VU
 - ハス VU
 - サデクサ VU
 - タヌキモ VU
 - ハンゲシヨウ EN
 - ミズアオイ VU
 - コウホネ VU

- 黒鳥周辺(西区)**
- アゼナ NT
 - スカシタゴボウ
 - タカサブロウ
 - コナギ
 - ケイヌビエ
 - スズメノカタビラ 外

- 鳥屋野潟周辺(中央区)**
- アゼナ NT
 - スギナ
 - シロザ
 - スベリヒユ

- 海老ヶ瀬周辺(東区)**
- アゼナ NT
 - ギシギシ
 - ガガイモ
 - コナギ
 - ミズアオイ VU

- 太夫浜周辺(北区)**
- サンショウモ VU
 - アゼナ NT
 - オオイヌタデ
 - オモダカ
 - フタクサ 外
 - オオフタクサ 外

- 上堰潟周辺(西蒲区)**
- アカメガシワ
 - ヨシ
 - モコモ
 - ミゾソバ
 - ヒナタイノコヅチ
 - ゲンノシヨウコ
 - オオオナノミ 外

- 西川地区(西蒲区)**
- ミスオオバコ VU
 - ミスアオイ VU
 - ミクリ NT
 - メリケンカルカヤ 外
 - オオアワガエリ 外

- 間瀬海岸周辺(西蒲区)**
- バシクルモン EN
 - ツボクサ LP
 - エゾノレンリンソウ
 - ハイハマボス VU
 - ハマゼリ

- 濁川周辺(北区)**
- オニバス VU
 - マツモ VU
 - ホザキノフサモ EN
 - クワイ
 - メマツヨイグサ 外
 - オオカナダモ 外

- 新川周辺(西区)**
- ミスワラビ NT
 - コウホネ
 - トチカガミ VU
 - ミスアオイ VU
 - アレチウリ 外
 - セイタカアワダチソウ 外

- 福島潟周辺(北区)**
- オニバス VU
 - サンショウモ VU
 - タコノアシ VU
 - ヒメビシ EN
 - ナガエミクリ NT
 - ノダイオウ VU
 - ミズアオイ VU
 - ミスオオバコ VU
 - ミズタガラシ EN

- 多宝山周辺(西蒲区)**
- アカガシ LP
 - ウラジロガシ LP
 - モチノキ LP
 - バシクルモン EN
 - フクジュソウ EN
 - ハルユキノシタ VU
 - ハマナス VU
 - ツボクサ LP
 - ヤマアイ
 - ミズバシヨウ

- 鯉潟周辺(西蒲区)**
- ナワシロイチゴ
 - ツユクサ
 - カモジグサ
 - オオイヌタデ
 - セリ
 - ヒルガオ
 - アレチウリ 外

- 新川周辺(西蒲区)**
- ミスワラビ NT
 - トチカガミ VU
 - ミスアオイ VU
 - アレチウリ 外
 - セイタカアワダチソウ 外

- 月潟地区(南区)**
- スギナ
 - スズメノテッポウ
 - ミノフスマ
 - イヌガラシ
 - トキワハゼ
 - オオカナダモ 外

- 小須戸地区(秋葉区)**
- スギナ
 - イヌタデ
 - アゼナ NT
 - メシバ
 - コゴメガヤツリ
 - セイタカアワダチソウ 外

- 新津丘陵周辺(秋葉区)**
- オミナエシ EN
 - トケンラン EN
 - カラタチバナ VU
 - キンラン VU
 - ホクリクムヨウラン VU
 - ミスワラビ NT
 - ヤガミスゲ NT
 - アカガシ LP
 - ウラジロガシ LP

注) 本分布図は旧市町村農村環境計画の生物調査資料を参考に作成され、各種生物調査資料にて生息が確認されている生物種を抜粋し掲載しています。

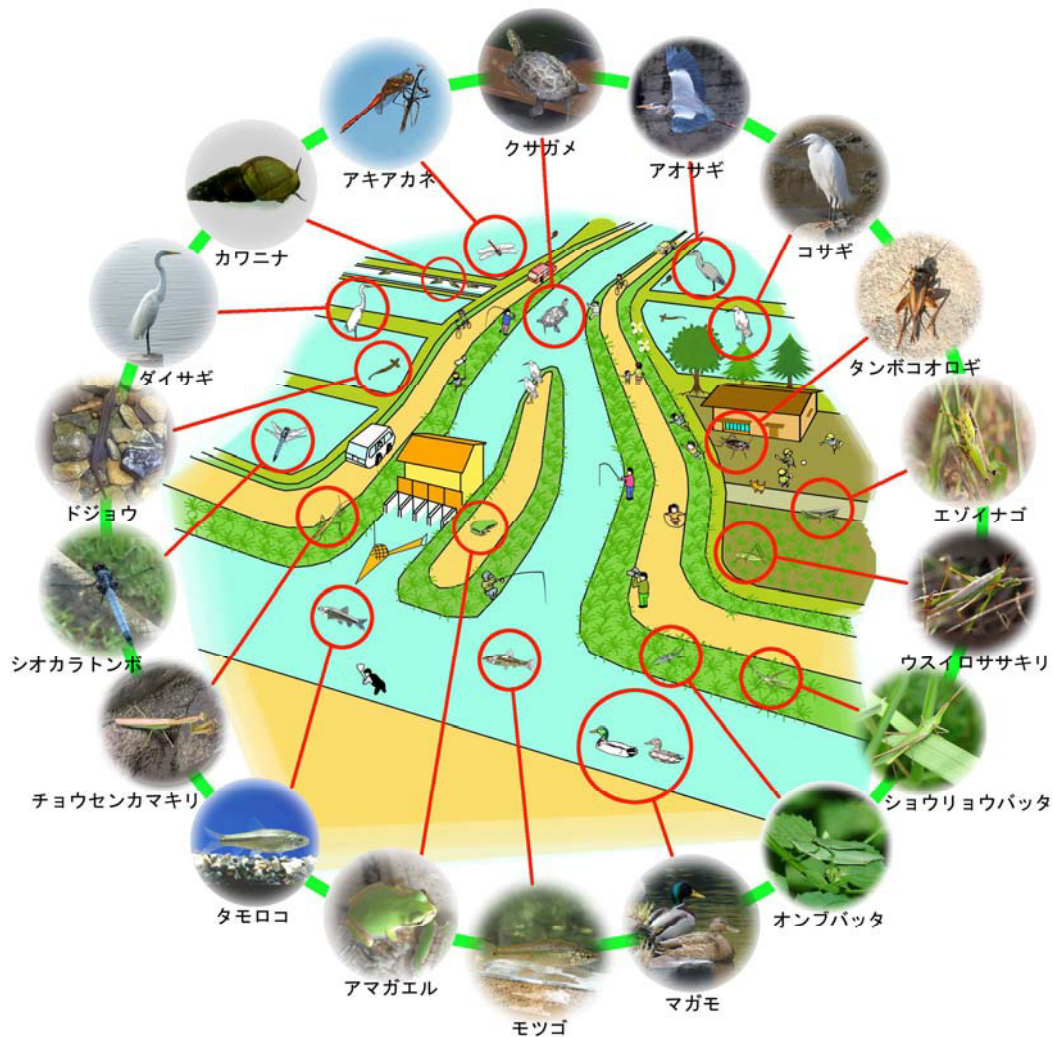
(2) 動物

① 身近な生き物

それぞれの地域の暮らしと関わりの深い生き物や、日常よく目にする「身近な生き物」に関心を持つことが、地域の「生物多様性の保全」につながります。

身近な生き物の暮らせる環境を守り、共生していくことは、地域の自然環境を未来の世代に引き継ぎ、安心して暮らせるまちづくりの形成につながります。

ここでは、市内の農村地域で日常よく目にする「身近な生き物」を紹介します。



生物多様性とは

生き物たちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生き物は40億年という長い歴史の中で、さまざまな環境に適応して進化し、3000万種ともいわれる多様な生き物が生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接的や間接的に支えあって生きています。生物多様性条約（1993年発効）では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとしています。

（環境省 自然環境局 自然環境計画課 生物多様性センター）

親しみやすい表現として、「生き物のにぎわい」と表現されています。

② 希少な動物

農村環境における生物多様性の保全・創出を図るには、農業農村整備事業実施の際に、環境配慮対策を立て進めます。環境配慮対策を立案するためには、地域の保全目標を設定するとともに保全対象動物を設定することで、環境配慮方針をより明確に示すことができます。

設定する動物は、希少動物（絶滅に瀕している種）だけでなく、地域の生態系を構成している代表的な種も設定対象となります。

ここでは新潟市で確認されている貴重な動物種を抜粋して紹介します。

■ 平野部水田地帯

農作業による水田環境の変化に合わせ、さまざまな動物が水田を生息場所として利用しています。

表 2-5 新潟市の希少動物一覧

類名	種和名	科和名	新潟市レッドデータブック ※
ほ乳類	エチゴモグラ	モグラ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
鳥類	コハクチョウ	カモ科	
鳥類	オオハクチョウ	カモ科	
鳥類	チュウサギ	サギ科	準絶滅危惧 (NT)
魚類	メダカ	メダカ科	準絶滅危惧 (NT)
魚類	アブラハヤ	コイ科	地域個体群 (LP)
魚類	ヤリタナゴ	コイ科	準絶滅危惧 (NT)
魚類	アカヒレタビラ	コイ科	準絶滅危惧 (NT)
魚類	ヌマチチブ	ハゼ科	
昆虫	タイコウチ	タイコウチ科	絶滅危惧Ⅰ類 (EN)
昆虫	ナゴヤサナエ	サナエトンボ科	準絶滅危惧 (NT)
底生生物	オオタニシ	タニシ科	準絶滅危惧 (NT)
底生生物	カラスガイ	イシガイ科	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
底生生物	モノアラガイ	モノアラガイ科	準絶滅危惧 (NT)

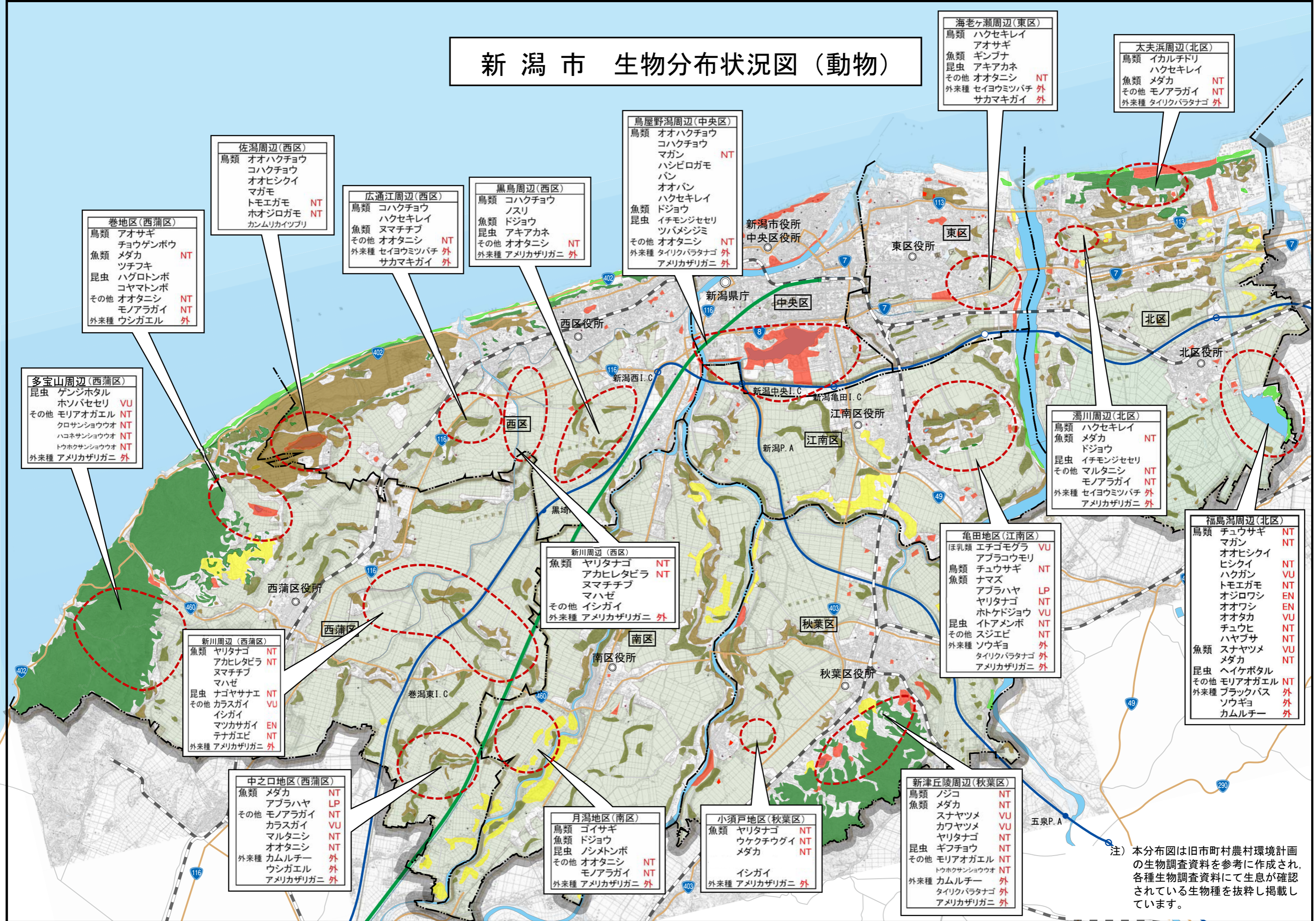


オオハクチョウ



ナゴヤサナエ

新潟市 生物分布状況図 (動物)



- 海老ヶ瀬周辺(東区)
- 鳥類 ハクセキレイ
 - 魚類 アオサギ
 - 昆虫 ギンブナ
 - その他 オオタニシ
 - 外来種 セイヨウミツバチ 外
 - サカマキガイ 外

- 太夫浜周辺(北区)
- 鳥類 イカルチドリ
 - ハクセキレイ
 - 魚類 メダカ
 - その他 モノアラガイ
 - 外来種 タイリクバラタナゴ 外

- 佐潟周辺(西区)
- 鳥類 オオハクチョウ
 - コハクチョウ
 - オオヒシクイ
 - マガモ
 - トモエガモ
 - ホオジロガモ
 - カンムリカイツブリ

- 広通江周辺(西区)
- 鳥類 コハクチョウ
 - ハクセキレイ
 - 魚類 ヌマチチブ
 - その他 オオタニシ
 - 外来種 セイヨウミツバチ 外
 - サカマキガイ 外

- 黒島周辺(西区)
- 鳥類 コハクチョウ
 - ノスリ
 - 魚類 ドジョウ
 - 昆虫 アキアカネ
 - その他 オオタニシ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 鳥屋野潟周辺(中央区)
- 鳥類 オオハクチョウ
 - コハクチョウ
 - マガモ
 - ハシビロガモ
 - バン
 - オオバン
 - ハクセキレイ
 - ドジョウ
 - 昆虫 イチモンジセセリ
 - ツバメシジミ
 - その他 オオタニシ
 - 外来種 タイリクバラタナゴ 外
 - アメリカザリガニ 外

- 巻地区(西蒲区)
- 鳥類 アオサギ
 - チョウゲンボウ
 - メダカ
 - ツチフキ
 - 昆虫 ハグロトンボ
 - コヤマトンボ
 - その他 オオタニシ
 - モノアラガイ
 - 外来種 ウシガエル

- 多宝山周辺(西蒲区)
- 昆虫 ゲンジホタル
 - ホノバセセリ
 - その他 モリアオガエル
 - クロサンショウウオ
 - ハコネサンショウウオ
 - トウホクサンショウウオ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 濁川周辺(北区)
- 鳥類 ハクセキレイ
 - 魚類 メダカ
 - ドジョウ
 - 昆虫 イチモンジセセリ
 - その他 マルタニシ
 - モノアラガイ
 - 外来種 セイヨウミツバチ 外
 - アメリカザリガニ 外

- 新川周辺(西区)
- 魚類 ヤリタナゴ
 - アカヒレタビラ
 - ヌマチチブ
 - マハゼ
 - その他 イシガイ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 新川周辺(西蒲区)
- 魚類 ヤリタナゴ
 - アカヒレタビラ
 - ヌマチチブ
 - マハゼ
 - 昆虫 ナゴヤサナエ
 - その他 カラスガイ
 - イシガイ
 - マツカサガイ
 - テナガエビ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 亀田地区(江南区)
- ほ乳類 エチゴモグラ
 - アブラコウモリ
 - 鳥類 チュウサギ
 - 魚類 ナマス
 - アブラハヤ
 - ヤリタナゴ
 - ホトケドジョウ
 - 昆虫 イトアメンボ
 - その他 スジエビ
 - 外来種 ソウギョ
 - タイリクバラタナゴ
 - アメリカザリガニ 外

- 福島潟周辺(北区)
- 鳥類 チュウサギ
 - マガモ
 - オオヒシクイ
 - ビシクイ
 - ハクガン
 - トモエガモ
 - オジロワシ
 - オオワシ
 - オオタカ
 - チュウヒ
 - ハヤブサ
 - スナヤツメ
 - メダカ
 - 昆虫 ヘイケボタル
 - その他 モリアオガエル
 - 外来種 ブラックバス
 - ソウギョ
 - カムルチー

- 中之口地区(西蒲区)
- 魚類 メダカ
 - アブラハヤ
 - その他 モノアラガイ
 - カラスガイ
 - マルタニシ
 - オオタニシ
 - 外来種 カムルチー
 - ウシガエル
 - アメリカザリガニ 外

- 月潟地区(南区)
- 鳥類 ゴイサギ
 - 魚類 ドジョウ
 - 昆虫 ノシメトンボ
 - その他 オオタニシ
 - モノアラガイ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 小須戸地区(秋葉区)
- 魚類 ヤリタナゴ
 - ウケクチウグイ
 - メダカ
 - イシガイ
 - 外来種 アメリカザリガニ 外

- 新津丘陵周辺(秋葉区)
- 鳥類 ノジコ
 - メダカ
 - スナヤツメ
 - カワヤツメ
 - ヤリタナゴ
 - 昆虫 ギフチョウ
 - その他 モリアオガエル
 - トウホクサンショウウオ
 - 外来種 カムルチー
 - タイリクバラタナゴ
 - アメリカザリガニ 外

注) 本分布図は旧市町村農村環境計画の生物調査資料を参考に作成され、各種生物調査資料にて生息が確認されている生物種を抜粋し掲載しています。

2.1.6 景観

本市は、日本海側初の政令指定都市であり「水の都」とも呼ばれます。

一方で、都市の魅力と自然・田園の持つゆったり感が共存し、調和している新潟独特の景観を見ることができます。

日本海に面し約30kmにわたる海岸線を持ち、海岸地区は、砂丘とクロマツなどの海岸保安林に囲まれ、そのすぐ近くには市街地が広がり、海岸は海水浴場として整備されています。海岸保安林のすぐそばに市街地が広がっている都市はほかにはなく新潟市特有の景色で、その素晴らしい景観は、日本の白砂青松100選にも選ばれるなど、広く市民に愛されています。

市内には、信濃川、阿賀野川の両大河が流れ、信濃川の両岸には、桜が植えられており川に親しめる「やすらぎ堤」や、日本海に注ぐ阿賀野川の広い河川空間を利用した公園が整備され、市民の憩いの場となっています。

また、ラムサール湿地として登録をされている佐潟とともに鳥屋野潟、福島潟など、多数の野鳥が飛来する湖沼を抱えており、動植物の生息・生育空間が築かれています。

越後平野には広々とした農地が広がり、角田、多宝、弥彦山の山並みや市街地と近接する丘陵などに自然の持つ多様な景観を楽しむことができます。

田園地帯では、「水田を中心とした穀倉地帯」「砂丘上に広がるスイカ畑」「春の花、秋の実りを楽しめる果樹畑」など様々な顔があり、「緑の絨毯（ジュウタン）となる田植時期」「黄金色に輝く刈り入れ時期」「冬には薄く雪のかぶった田畑で餌をついばむハクチョウの姿」が見られます。

まさに自然の宝庫であり、都市近郊においてこれほど豊かな景観があることで、新潟市をより魅力的な都市にしているといえます。



新潟市西蒲区岩室地区



新潟市中央区

2.2 新潟市の現状

2.2.1 自然環境の現状

(1) 動植物の生態系の変化

本市は、豊かな自然や水辺空間を有していることから、越後平野の湖沼群は、水鳥にとって重要な生息環境であり、特にコハクチョウの越冬地としては日本有数です。

潟については、周辺農地から流入する栄養塩(※1)の影響による富栄養化(※2)により、水の出入りの少ない場所においては、藻などが大量発生し水質の悪化が問題となっています。佐潟については、保全計画に基づいた対策が行われており、さらに実行性のある対策が課題となっています。

農村部における水田や用排水路においては、生産性の効率化による施設整備の影響により、生物生息・生育環境の減少が課題となっています。

角田、多宝、弥彦山や新津丘陵などの山地丘陵帯は、多様な動植物の生育・生息の場になっている一方で、自生植物の盗採などによる生態系への影響問題が生じています。

希少種については、新潟市レッドデータブックで絶滅・野生絶滅が動物3種、植物20種、絶滅の恐れのある種(絶滅危惧Ⅰ種及び絶滅危惧Ⅱ種)として、動物57種、植物111種が選定されています。(表2-7参照)

※1【栄養塩】

炭素、水素、酸素以外の無機塩類として存在する植物の生命を維持する栄養分として必要な、リン、窒素、カリ、珪素などの主要元素とマンガン等の微量元素のこと。

※2【富栄養化】

元来は湖沼等閉鎖水域が、長年にわたり流域から窒素化合物及びリン酸塩等の栄養塩類を供給されて、生物生産の高い富栄養湖に移り変わっていく自然現象のこと。

表2-6 市内の自然環境の保全に関する指定地域等

名 称	地 域
ラムサール条約	佐潟
国定公園	佐渡弥彦米山国定公園
国指定鳥獣保護区	佐潟鳥獣保護区・福島潟鳥獣保護区
県指定鳥獣保護区	鳥屋野潟鳥獣保護区・新潟角田鳥獣保護区・弥彦鳥獣保護区・秋葉鳥獣保護区
県自然環境保全条約緑地環境保全地域	菖蒲塚古墳
風致地区	白山風致地区・新潟海岸風致地区・第一・第二秋葉風致地区

資料：～大切にしたい野生生物～新潟市レッドデータブック（新潟市環境政策課）

表2-7 新潟市レッドデータブック選定種（2010年版）

分類	絶滅 (EX)	野生絶滅 (EW)	絶滅危惧 I種(EN)	絶滅危惧 II種(VU)	準絶滅 危惧(NT)	地域 個体群 (LP)	合計
哺乳類				1			1
鳥類			2	9	31		42
両生類			3	1	5		9
爬虫類							0
淡水魚類	2		1	3	15	1	22
大型水生 甲殻類					7		7
昆虫類	1		14	7	28	9	59
陸産・ 淡水産貝類			9	7	14		30
維管束植物		20	50	61	42	15	188
合計	3	20	79	89	142	25	358

資料：～大切にしたい野生生物～新潟市レッドデータブック（新潟市環境政策課）

(2) 気候の変化

現在、温室効果ガス(※)の増加によって地球温暖化が進む傾向にあります。本市においても1900年代後半から平均気温が徐々に上昇し、2000年までの100年間で1.3度上昇しています。

温暖化の影響によって河川上流部での降水量の変化が生じると、田植え時期の農業用水不足等が起こり、かつ高温による品質低下や病虫害の増加など、農業生産へも大きな打撃となることが懸念されます。

また、海岸線が長く、海面より低い地域が多いという本市の地勢の特徴上、高潮や浸水の危険度が高くなると考えられます。

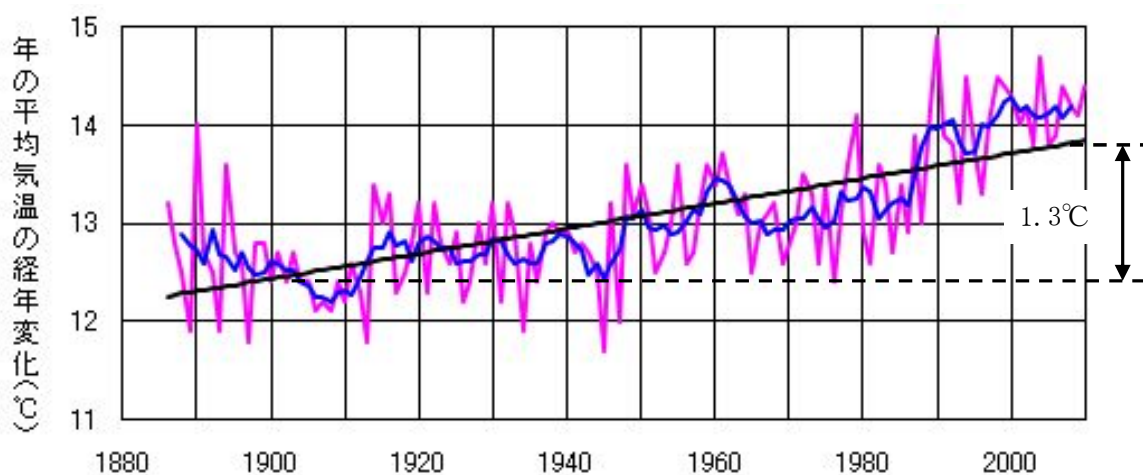


図 2-6 新潟市気象経年変化

資料：新潟地方気象台

※【温室効果ガス】
地球温暖化の主因とされる大気中の二酸化炭素やメタンなどのこと。(京都議定書では6種類)

2.2.2 農業生産環境の現状

(1) 農業経営の変化

本市の農業・農村環境の問題点として、農業の担い手不足や農業従事者の高齢化などがあげられます。

図2-7の新潟市の農業就業人口比率の推移をみても、平成7年における65歳以上の割合が36.5%であったのに対し、平成22年現在の65歳以上の比率は53.9%と17.4%増加しており、本市における農業就業者の高齢化が急激に進んでいます。

本市の農業従事者の平均年齢は64.1歳で、高齢化は今後ますます進んでいくと考えられます。(表2-8参照)

表2-8 新潟市の農業経営の状況

項目	北区	東区	中央区	江南区	秋葉区	南区	西区	西蒲区	新潟市全体
農家戸数(戸)	1,992	362	254	1,750	1,667	2,272	1,446	2,947	12,690
農家人口(人)	3,069	515	375	2,506	2,162	3,627	2,491	4,323	19,068
農業従事者平均年齢(歳)	65.1	62.8	62.0	65.4	66.2	63.7	61.5	66.2	64.1
経営耕地面積(ha)	4,424	685	455	3,292	3,418	5,426	3,952	7,276	28,928
耕作放棄地(ha)	111.49	19.14	12.40	56.67	74.30	49.44	179.28	220.09	722.81

資料：2010年世界農林業センサス
新潟県確定値

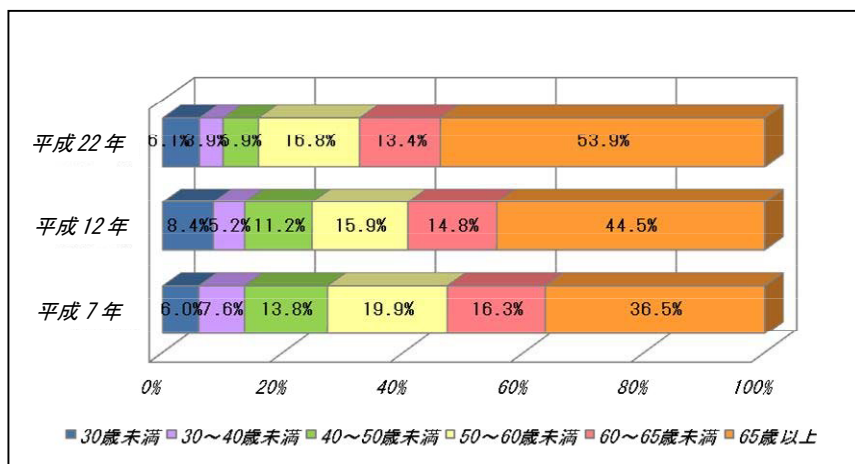


図2-7 新潟市農業就業人口比率

資料：国勢調査
2010年世界農林業センサス
新潟県確定値

典型的な例としてたばこ農家の現状を見ると、農業従事者の高齢化とたばこ離れによる出荷量の減少が重なり、多くが需給調整を受け、平成23年度の出荷を最後に廃作による耕作放棄地の増加が懸念されています。

耕作放棄地は、年々増加し本市全体で平成7年の155haに対し平成22年は723haにも膨れあがっています（図2-8参照）。

本市の農業を考える上で重要な問題点となっています。

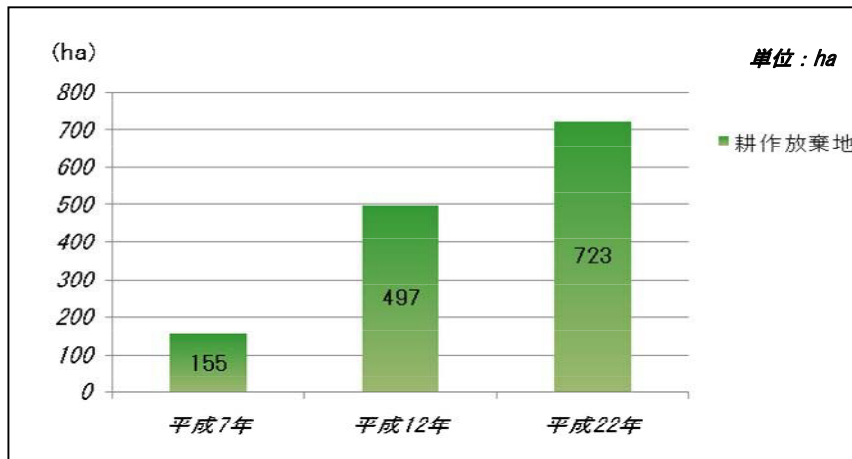


図2-8 新潟市耕作放棄地の推移 資料：2010年世界農林業センサス 新潟県確定値

本市の農家数の推移を見ると、第1種兼業農家は、平成12年では3,496戸であるのに対し平成22年では2,550戸と946戸減少しています。第2種兼業農家においては、平成7年が5,136戸であるのに対し平成22年は2,550戸であり約半数に減少しています。専業農家数をみると、平成7年には1,508戸であるのに対し平成22年は1,774戸と266戸増加しています（図2-9参照）。

ほ場整備の進捗とともに農地の集積化が進み、それに伴い専業農家が増えていることが農家数の推移から推測されます。今後もほ場整備を推進し、農地の集積化による農作業の効率化を進めていくことも重要です。

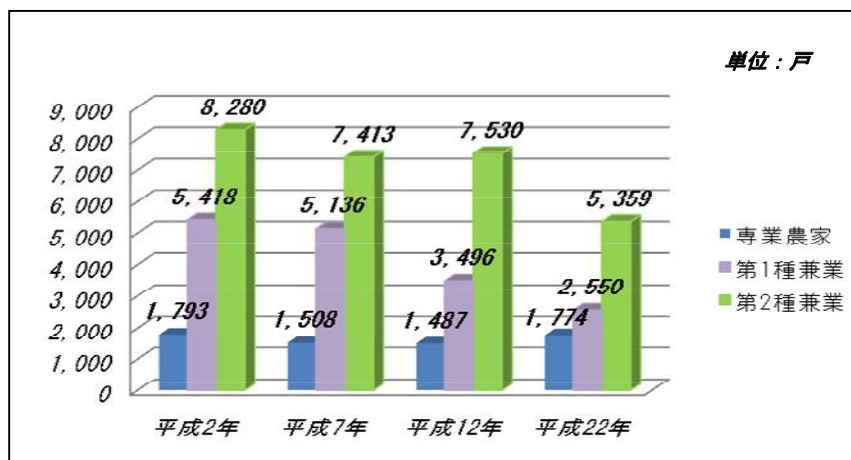


図2-9 新潟市農家数の推移 資料：国勢調査 2010年世界農林業センサス 新潟県確定値

(2) 市内農産物の状況

本市の農業産出額(※)は、平成18年で約655億円、市町村別では全国3位の規模です。なかでも米は、本市の農業経営における基幹作物であり、農業産出額全体の約57%を占めています。

また米のほかにも、野菜・果物・花き・畜産など、多種多様な農産物が生産され、野菜・果樹の作付面積・収穫量ともに県内1位の作物が多く見受けられます。

(農業生産の概況については参考資料参照)

■ 主な農業生産物

表2-9 農業生産物(水稻, 大豆, 葉たばこ)

項目	単位	数値	全県数値	県内順位	県内に占める割合	備考	
水稻	作付面積	ha	24,100	117,900	1	20.4%	農林水産関係市町村別統計(H22値), 作物統計(H22値)
	収穫量	t	136,000	617,800	1	22.0%	
	10アール当たり収量	kg	565	524	—	—	
大豆	作付面積	ha	1,500	6,670	1	22.5%	"
	収穫量	t	2,150	9,740	1	22.1%	
葉たばこ販売重量	t	676	1,237	1	54.6%	H22年産新潟県たばこ耕作組合販売実績	

※【農業産出額】

農業生産活動による最終生産物の総生産額のこと。

■ 野菜, 果樹

表2-10 農業生産物（野菜, 果樹）

項目	作付面積（果樹は栽培面積）					収穫量				
	単位	数値	全県数値	県内順位	県内に占める割合(%)	単位	数値	全県数値	県内順位	県内に占める割合(%)
だいこん	ha	575	1,700	1	33.8	t	28,500	59,000	1	48.3
かぶ	〃	79	196	1	40.3	〃	2,900	4,610	1	62.9
はくさい	〃	102	498	1	20.5	〃	2,260	11,000	1	20.5
キャベツ	〃	184	585	1	31.5	〃	5,420	15,600	1	34.7
ほうれんそう	〃	81	226	1	35.8	〃	950	2,370	1	40.1
ねぎ	〃	240	777	1	30.9	〃	4,810	14,000	1	34.4
たまねぎ	〃	88	239	1	36.8	〃	2,230	5,390	1	41.4
なす	〃	144	715	1	20.1	〃	1,950	9,470	1	20.6
きゅうり	〃	148	557	1	26.6	〃	4,670	12,100	1	38.6
カリフラワー	〃	23	91	1	25.3	〃	370	1,370	2	27.0
ピーマン	〃	20	84	1	23.8	〃	250	1,070	1	23.4
すいか	〃	310	682	1	45.5	〃	12,900	21,100	1	61.1
ばれいしょ	〃	172	927	1	18.6	〃	3,100	17,500	1	17.7
そらまめ	〃	69	85	1	81.2	〃	649	778	1	83.4
えだまめ	〃	756	1,560	1	48.5	〃	2,560	5,370	1	47.7
レタス	〃	28	63	1	44.4	〃	402	816	1	49.3
にんじん	〃	110	330	1	33.3	〃	2,550	6,270	1	40.7
さといも	〃	146	706	1	20.7	〃	1,650	7,480	1	22.1
トマト	〃	151	479	1	31.5	〃	4,850	12,600	1	38.5
日本なし	〃	331	569	1	58.2	〃	8,760	15,500	1	56.5
西洋なし	〃	54	101	1	53.5	〃	959	1,730	1	55.4
もも	〃	131	278	1	47.1	〃	1,310	2,840	1	46.1
かき	〃	203	865	2	23.5	〃	2,870	10,400	2	27.6
ぶどう	〃	184	372	1	49.5	〃	1,670	3,120	1	53.5

(新潟農林水産統計年報 平成18年値)

■ 切花, 球根, 花木類

表2-11 農業生産物（切花, 球根, 花木）

項目	作付面積（果樹は栽培面積）					収穫量				
	単位	数値	全県数値	県内順位	県内に占める割合(%)	単位	数値	全県数値	県内順位	県内に占める割合(%)
チューリップ (切花)	a	1,230	2,143	1	57.4	千本	13,300	23,172	1	57.4
チューリップ (球根)	〃	4,270	12,571	2	34.0	千球	7,390	21,975	1	33.6
花木類	〃	9,240	11,233	1	82.0	千鉢	11,800	12,119	1	97.4

(新潟県18年産花き市町村別統計)

(3) 農業生産等の概況

■ 水稲作柄状況

平成21年産米の出荷量は、主食用水稲うるち米が83.5%であり、そのうち主要品種のコシヒカリが81.5%、こしいぶきが15.2%となっています。

近年の水稲の品質低下の一因として、地球温暖化の影響による登熟期の高温が原因であるといわれています。こうした環境変化に対応するためにも、水稲の品質向上への取り組みを進めていくことが重要です。

表2-12 平成21年産 米等級比率一覧表

種類 \ 区分	検査総数 (60kg換算個)	比率 (%)
水稲うるち米	1,240,042	83.58%
醸造用玄米	14,784	1.00%
もち玄米	101,409	6.83%
加工用米※	127,473	8.59%
合計	1,483,708	100.00%

(12月末現在のJA・主食用集荷組合報告値)

※加工用米は、JA報告値のみ

(4) 農村基盤の整備状況

近年は食料自給率（※1）の低下が問題となっています。本市においては63%（平成20年数値）と高く、他の政令指定都市より高い状況にあります。（図2-10参照）

本市の農業は、水害をはじめとした自然災害とのたたかいを、共に助け合い・克服し土地改良を進めてきた先人の努力が、今日に営々として引き継がれてきた結果といえます。

本市の農業基盤整備率（※2）は、43.0%であり、秋葉区・西蒲区では基盤整備率が低いことから、今後基盤整備事業が多く予定されています。

農業用排水施設の整備は進んでおり、市内の基幹的な用水路はL=146km、排水路はL=139kmです。（新潟市域農業水利施設機能保全対象施設）

本市には、排水機場が63施設あり、低平地であるため常時排水を行っている排水施設もあります。

農業用排水施設は、基盤施設としての役割とともに都市部の浸水を防ぐ役割も果たしており、排水ポンプにより都市住民の生活や安全を守っているということを市民全体に広くPRすることが重要です。

都市住民が、農業用施設を身近なものと感じ、重要であることをお互いに理解するような仕組みづくりが必要といえます。

表2-13 新潟市施設概要一覧表

施設区分	農業用施設
頭首工	1施設
揚水機場	51施設
排水機場	63施設
樋門	2施設
用水路	146,295m
排水路	139,019m

H23年3月現在

（※1）【食料自給率】

カロリーベース換算とする。品目ごとに1人1日当たり供給純食料を熱量(kcal)に換算したもの。

（※2）【農業基盤整備率】

ほ場整備済み面積比率を表す。「ほ場整備済み」とは、原則として標準区画(新潟市では30a程度)以上で道路、用水路、排水路等が整備され、中・大型機械化体系の営農が可能なほ場を表します。

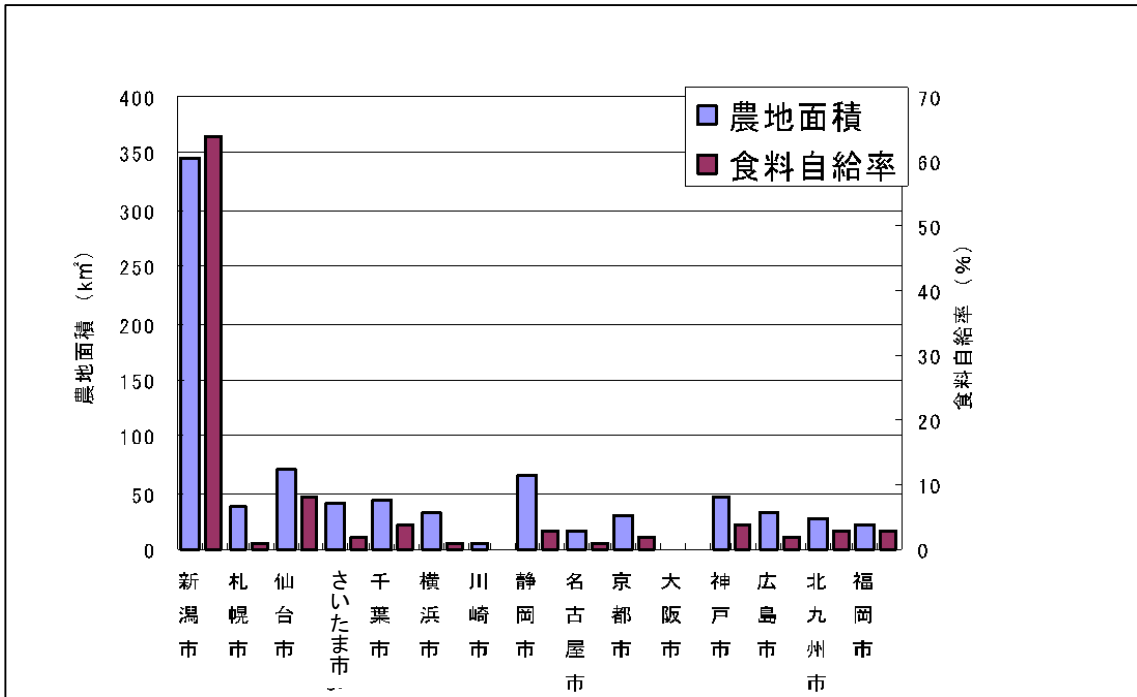


図 2-10 H20 年度食料自給率・農地面積比較

資料：新潟市

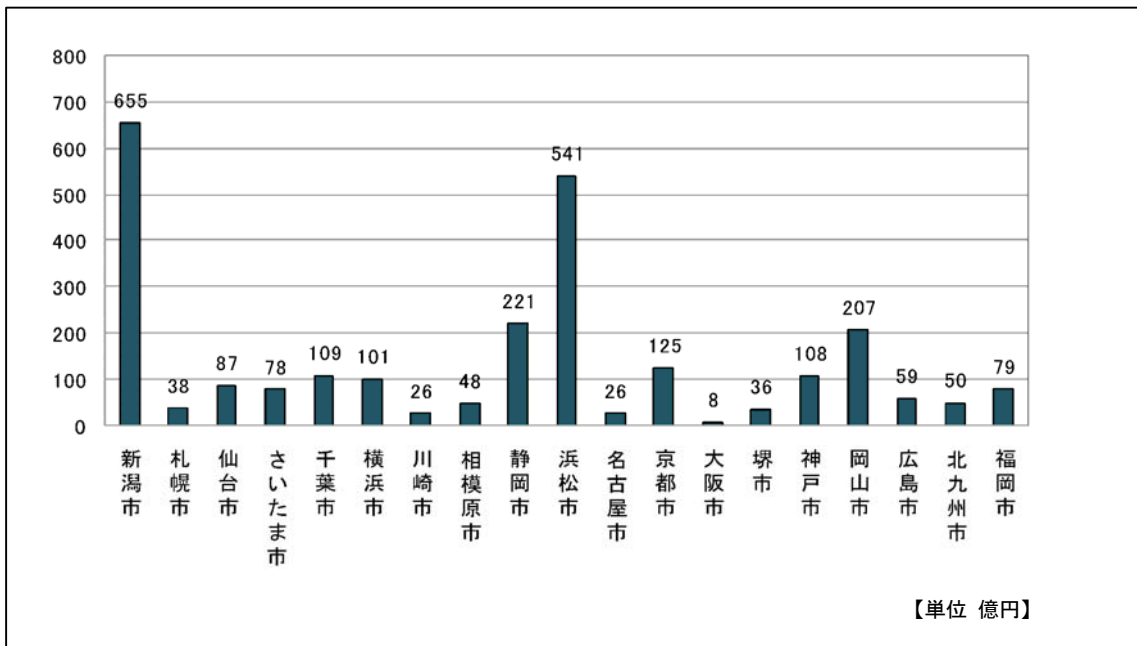


図 2-11 H18 年農業産出額(政令指定都市)

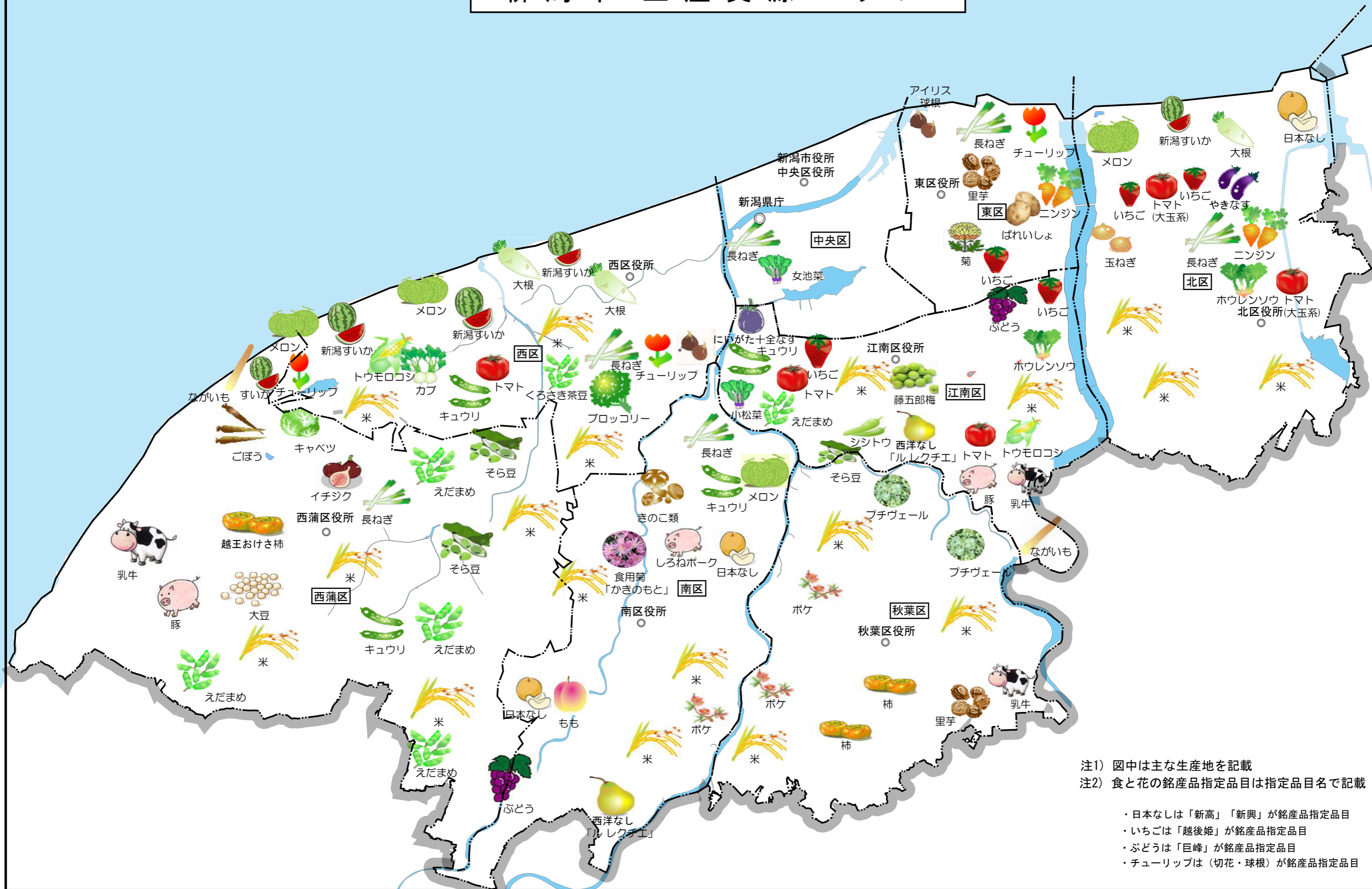
資料：平成 18 年
生産農業所得



新潟市北区
～福島潟の菜の花と桜～



新潟市生産資源マップ



注1) 図中は主な生産地を記載
 注2) 食と花の銘産品指定品目は指定品目名で記載

- ・日本なしは「新高」「新興」が銘産品指定品目
- ・いちごは「越後姫」が銘産品指定品目
- ・ぶどうは「巨峰」が銘産品指定品目
- ・チューリップは(切花・球根)が銘産品指定品目

2.2.3 社会環境の現状

(1) 農村集落における環境保全の動き

近年は、環境問題に対する関心が高まるとともに、農業生産活動においても環境保全を重視することが求められてきています。

将来的な農業・農村の基盤を支え、環境の向上を図る対策として農林水産省では平成19年度から「農地・水・環境保全向上対策」を実施しています。

農業者だけでなく地域住民、自治会、関係団体などが幅広く参加する活動組織を立ち上げ、農業用施設の維持管理や農村の自然や景観などを守る地域の共同活動を促しています。また、地域協働活動に加えて化学肥料と化学合成農薬の5割低減等の環境にやさしい農業に向けた地域での取り組みを促しており、本市においても多くの組織が活動しています。

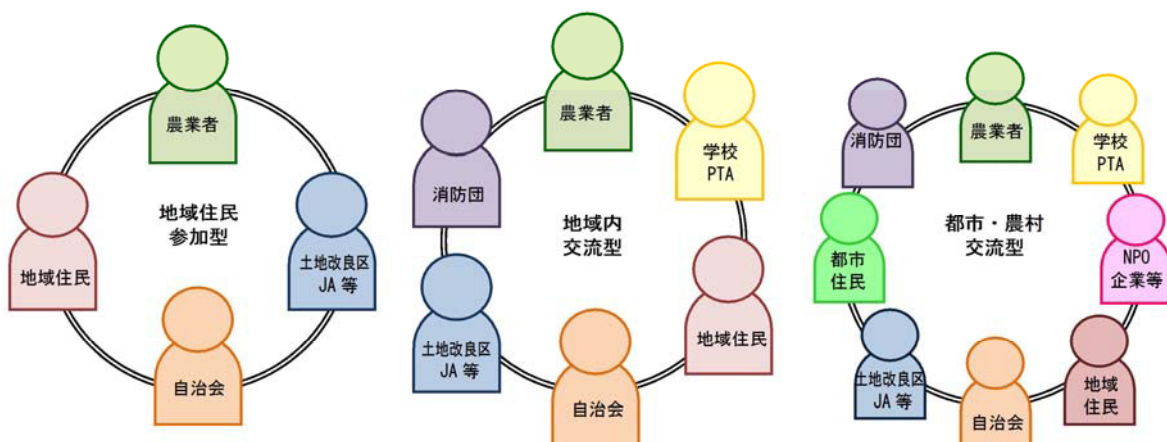
(表2-14 参照)

今後も地域が一体となった農村環境づくりが求められています。

表2-14 農地・水・環境保全向上対策活動団体の推移

年度	活動団体数	取組面積 (ha)
平成19年度	125 団体	9,171.62
平成20年度	127 団体	9,489.56
平成21年度	130 団体	9,736.34
平成22年度	130 団体	9,736.34
平成23年度	130 団体	9,736.34

農地・水・環境保全向上対策の様々な構成員の参加の例



(2) 農業農村環境の活用の動き

農村地域における農地や農業用施設等は、作物生産施設としての機能と洪水防止や大気の保全、やすらぎの場の提供などの多面的な機能を有しています。本市では、市民の「農業」への関心や「農業体験の場」の重要が高まっています。農業体験や生産者との交流などを通じて、農業・農村への理解を深め、農のある暮らしの楽しみ方を学ぶ場として農業体験教室などを行っています。

農業・農村の資源を活用してその魅力を発信し、農村と都市の双方の魅力を味わえる都市型グリーン・ツーリズムを行うなどの取り組みが行われています。

表 2-15 自由時間の過ごし方における潜在ニーズ諮問

順位	項目名	差 (%)	現在 (%)	現在順位	今後 (%)	今後順位
1位	一泊二日以上の温泉・名所旧跡を訪ねる旅行	23.3	33.6	12	56.9	1
2位	一泊二日以上 の田舎体験旅行	22.7	4.9	26	27.6	13
3位	日帰りの田舎体験旅行	19.5	5.1	25	24.6	17
4位	学習・教養活動	17.1	14.8	18	31.9	10
5位	環境保全や福祉等のボランティア活動	13.4	8.6	20	22	18
6位	神社・仏閣めぐり	12.7	12.8	19	25.5	16
7位	日帰りのハイキング・温泉等	11.9	33.7	11	45.6	3
8位	家庭菜園・ガーデニング・市民農園	10.3	20.2	16	30.5	11
9位	釣り	9.1	5.9	24	15	22
10位	地域でのボランティア活動	5.3	6.6	23	11.9	23

資料：平成16年度交流意向調査報告書
(平成17年3月都市農山村漁村交流活性化機構実施)より表中太字はグリーン・ツーリズム

農業を取り巻く環境の問題点としては、農業の担い手不足や農業従事者の高齢化などがあげられます。

担い手不足の解消には、様々な対応策があげられますが、今後の農業の持続的な発展を考えると、将来を担う子どもたちへ環境・農業学習が重要な意味を持つと考えられます。

本市においても、食育を推進し地場農産物を積極的に給食に取入れる取り組みや、子ども農業体験交流事業などを行い、将来子どもたちが、農業に関心を高めるための取り組みを行っています。

高齢化で労働力不足になっている農家を都市住民が助ける農業サポーター（ボランティア）にも多くの方が登録しています。

また、市民農園の充実を図ることにより、農業者と都市住民の新しい関係が生まれます。

表 2-16 新潟市市民農園利用の動向

年度	募集区画数	応募者数	倍率
平成 19 年度	338 区画	465	1.38
平成 20 年度	259 区画	355	1.37
平成 21 年度	215 区画	337	1.57
平成 22 年度	218 区画	287	1.32



越前浜市民農園

2.3 環境の評価

2.3.1 課題の抽出

住民意向調査・現況調査等により、本市の課題を抽出します。

(1) 自然環境の現状と課題

■自然豊かな水辺と生物生息・生育空間の保全

河川・湖沼・水路等は、水生生物の貴重な生息・生育空間となっています。以前は、豊かな水に恵まれていましたが、近年、水質汚濁や自然環境の減少により生物の生息・生育環境が減少してきていることから、自然環境の保全機能を持つ農村地域の生態系の保全に努める必要があります。

■地域景観の保全

「平野部に広がる水田の景観」「春になると果樹の花やチューリップの咲き誇る景観」「点在する集落景観」「市内にみられるはさ木並木の風景」など、市民の安らぎとなる魅力ある景観を保全・再生していくことが必要とされています。

■環境教育の場の創出と環境教育の拡充

近年は、身近で自然と触れ合える場が失われているため、子どもたちが自然と触れ合い、環境について学べる場所が必要とされています。

(2) 生産環境の現状と課題

■地域環境保全の促進

近年は、農業従事者の高齢化等により、地域環境の保全を農業従事者のみが行うことは難しい状況にあります。都市住民・行政を含め一体となって地域の環境や生産環境の保全を図ることが求められています。

また、環境用水の導入による水質環境の向上・生物生息・生育環境の創造などが求められています。

■環境保全型農業の推進

消費者の安全志向を考慮して、化学肥料や化学合成農薬・除草剤を減らすなど持続可能な環境保全型農業を拡大・推進し、安心・安全な食料を供給することが求められています。

また、農業用施設は生態系ネットワークの一部を担っています。生物多様性に配慮した施設整備や維持管理の推進を図る必要があります。

(3) 社会環境の現状と課題

■農地の持つ防災機能の発揮

本市は、低平地が多いため水害の被害を受けやすい地形にあります。農業用排水機場の常時排水などによって都市部の生活は守られていますが、近年の自然災害に対応するため、農地の持つ防災機能を「田んぼダム」などとして活用し、災害に強いまちづくりを進めていく必要があります。

■子どもたちへの農業教育の場の創出

都市部の子どもたちの中には、野菜や米がどのようにできるのか、生産者がどのような苦勞をして生産しているのかを知らない子どもたちも大勢います。

田園型政令指定都市として、本市が今後発展していくためには農業教育や農業体験の場づくりが重要です。農業体験などを通じて、農村部と都市部の交流の促進を図ることが求められています。

■地域文化の保存・継承

現在は、以前には普通にみられた農村集落活動が少なくなっています。

本市のそれぞれの地域における独自の文化を保存・継承していくことが求められています。

■農村と都市との相互理解による地域づくり

農村地域は、農業用施設による都市生活の安心を守る役割や、ゆとりある空間を創出し、都市部住民に潤いを与えています。都市近郊に豊かな農村地域が広がる本市の地の利を生かした魅力的な地域づくりが求められています。

2.3.2 既存調査

旧14市町村で作成した農村環境計画では、下記に記した通り住民意向調査・現況調査を行いました。（詳細については参考資料参照）

表2-17 旧市町村住民意向調査・現況調査実施内容一覧表

区名	旧市町村名	実施年度	配布人数	有効回答率	備考	
北東中央西	新潟市	平成16年1月	20歳以上 1,980名	41%	曾野木(江南区) 両川(江南区) 大江山(江南区)	
			中学生 537名	100%		
北区	豊栄市	平成15年11月	農村部中心 605通	85%		
			中学生 524名	100%		
江南区	横越町	平成16年12月	満20歳以上 500名	58%	十二前(北区)	
			中学3年生 119名	93%		
	亀田町	平成16年12月	16歳以上 1,100名	40%		
			中学3年生 359名	94%		
秋葉区	新津市	平成16年5月	農家 1,000通	84%		
	小須戸町	平成16年2月	15~80歳 600名	48%		
			中学生 211名	93%		
南区	白根市	平成14年6月	満20歳以上 500名	32%		
	味方村	平成16年11月	10~60歳 650名	53%		
			中学生 135名	96%		
	月潟村	平成14年8月	10~60歳 500名	40%		
			中学生 136名	100%		
	西蒲区	中之口村	平成15年2月	10~60歳 650名		55%
中学生 212名				100%		
岩室村		平成15年11月	15~80歳 718名	62%		
潟東村		平成16年12月	満18歳以上 650名	54%		
			中学生 176名	94%		
西川町		平成16年11月	18~65歳 817名	35%		
巻町		平成14年9月	10~50歳 700名	28%	四郷屋(西区)	
			中学生 339名	96%		

(1) 住民意向調査・現況調査結果一覧表

■ 自然環境に関する項目

北区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 太夫浜にメダカ、モノアライガイ、サンショウモ等の絶滅危惧種が生息している 南浜の海岸林には、オオタカ等の生息が確認されている 福島潟では自然保護のための市民活動が展開されている 	<p>市内の河川・湖沼・水路等は以前、水生生物の貴重な生息空間となっていた。近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少している。農村地域の生態系の保全に努める必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 人口、世帯数の増加に伴い宅地化がすすんでいる。宅地化に伴い雑排水の農業用排水路等への混入が増えている 	<p>自然環境の悪化や水質の悪化が懸念されており、環境教育の拡充や意識啓発を図る必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 農業用排水路は柵渠や鋼矢板水路が多くなり、それに伴い、昔は水路で見かけた生き物が見かけられなくなった 福島潟は流入河川が運ぶ土砂が堆積し、年々陸化が進んでいる 	<p>近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため、生態系の保全に努める必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 福島潟は背景の五頭連峰や四季の変化により、良好な景観を形成・維持している 市街地にメタセコイヤや桜の並木が良好な景観を形成している 日本海東北自動車道の開通や福島潟放水路の開削により農村景観が変化した 	<p>地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である</p>

東区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> ニホンアマガエル、アキアカネ等の生息が確認されている 	<p>近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 水辺環境として、阿賀野川、清五郎潟、北山の池といった湖沼があるが近年水質の悪化が懸念されている 	<p>自然環境の悪化や水質の悪化が懸念されており、環境教育の拡充や意識啓発を図る必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 河渡の砂丘地には、地下水により形成された砂丘湖(じゅんさい池)と海岸防風林のアカマツ林がある 	<p>豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある</p>

中央区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 自然とふれあえる機会が少ない 	<p>豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 鳥屋野潟、信濃川等水辺環境が豊かである 	<p>近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 信濃川、鳥屋野潟といった水辺環境があるが、近年水質が悪化している 	<p>自然環境の悪化や水質の悪化が懸念されており、環境教育の拡充や意識啓発を図る必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 低地は宅地化され自然植生は消滅した 	<p>近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある</p>
<ul style="list-style-type: none"> 日和山海岸から金衛町海岸まで、全長約5kmにわたって黒松林を利用した公園があり、日本の白砂青松百選にも選ばれている 	<p>豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある</p>

江南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 近年の農業用施設は機能性が重視されている 自然環境に配慮した整備を考慮する必要がある 住みやすさ、交通の利便性等が優先されたことにより自然環境が減っている 	→	近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 人口、世帯数の増加が進み宅地化がすすんでいる 宅地化に伴い自然環境の減少が著しい 	→	豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある

秋葉区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 河川、池沼など豊かな水に恵まれて、水生生物等の貴重な生息空間となっている 今後も自然豊かな水辺の保全と活用が必要とされている 	→	近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 新津丘陵は、貴重な動植物等が生息し、豊かな生態系を維持するために適切な保全対策を展開する必要がある 	→	豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 幹線用排水路が町内を縦断する形で通っているため、身近な小動物の移動の障害になっている 里山などで、昔は生息していた動植物が最近ではあまり見かけられなくなった 農地を保全し、環境負荷の少ない農業の導入や環境に配慮した農業基盤整備を進める必要がある 	→	市内の河川・湖沼・水路等は以前、水生生物の貴重な生息空間となっていた。近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため、農村地域の生態系の保全に努める必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 平野部一面に広がる水田景観、点在する集落景観、市を代表する満願寺はさ並木風景など、魅力ある農村景観の保全が必要とされている 花と緑の町らしく、町中に色鮮やかな花木が立ち並ぶ 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である

南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 昔はカラスガイ、トノサマガエル、蛍、メダカ、ドジョウなど川の小動物はたくさんいた 水路の改修でドジョウやメダカがいなくなった 	→	近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しているため生態系の保全に努める必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 自然と触れ合える場所が減っている 中ノ口川付近には自然が残っている 	→	豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 四季折々の美しい田園風景を見ることができる (チューリップ畑の風景・桃畑の花の風景など) 田んぼや水路に渡り鳥が羽を休めている 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である

西区住民意向調査・現況調査

- 西川・新川の自然環境が減少している
- 近隣の水田でメダカやカエルなどを見かけなくなった
- 西川は矢板護岸で整備されている
- 矢板護岸・コンクリート柵渠水路が多い

市内の河川・湖沼・水路等は以前、水生生物の貴重な生息空間となっていた。近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少しています。農村地域の生態系の保全に努める必要がある

- 海岸防風林のクロマツ林が宅地化で減少している
- 海岸林と海岸の保全活動が盛んである

地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していく必要がある

西蒲区住民意向調査・現況調査

- 払川を中心に山麓付近には、たくさんのホタルが自生しており、生物の棲息空間として重要である
- 天神山のひょうたん池はクロサンショウウオやモリアオガエルの大規模な産卵池となっている
また石瀬神社裏の沢は、ハコネサンショウウオの生息地及び豊かな繁殖地となっている
- 昔のように、水田や水路にホタルが飛ぶような環境が求められている

市内の河川・湖沼・水路等は、以前水生生物の貴重な生息空間となっていた。近年自然環境の減少により生物生息・生育空間が減少している。農村地域の生態系の保全に努める必要がある

- 歴史あるハザ並木や田園の景観の保全も重要であり、整備に当たっては環境や景観への配慮が求められている
- 間瀬海岸の砂浜は、浸食を受け年々狭くなって来ている
- 宅地化に伴い森林の伐採等もおこなわれている

地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していく必要がある

■生産環境に関する項目

北区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 豊栄地区の水田では、約7割が20アール以上にほ場整備されている 	→	農業基盤の整備
<ul style="list-style-type: none"> 経営耕地面積の9割近くが水田であり米作を中心としているが、畑作も盛んで多様な作物を栽培する都市近郊型農業である スイカ・メロン等の砂丘地農業の盛んな地区である 	→	農業の持続的発展を図る 農業基盤の整備
<ul style="list-style-type: none"> 消費者の生産物に対する「安全・安心」が求められている 生産者にも環境保全型農業を進めたいという意見が多い 地元野菜が流通しやすい仕組みが求められている 	→	安心・安全な地元生産物を提供する
<ul style="list-style-type: none"> 地元農業の発展が求められている 	→	農業の持続的発展を図る 農業基盤の整備

東区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> かつて木材の運搬路だった通船川は生活排水、事業所排水の流れる川となり水質が悪化している 	→	地域住民参加による水質汚濁防止活動の推進を図る
<ul style="list-style-type: none"> 宅地化の進行に伴い農地が減少傾向にある。市街地に隣接しているため、農村と都市の交流施設の立地場所に適している新鮮な地元農産物の評判が良い 	→	地域のコミュニティづくりの推進する
<ul style="list-style-type: none"> 阿賀野川沿いの田園地帯を除くと、ほとんどが市街化された住宅地である 住宅用地が工場用地に取り囲まれており、宅地周辺には緑が少ない 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である

中央区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 信濃川、鳥屋野潟周辺は、公園として整備されており市民の憩いの場となっている 	→	豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 西堀はかつて寺町と呼ばれており、現在も西堀沿いにはお寺が多い 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である

江南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 鳥屋野潟より東南地域には、豊かな田園地帯が広がっている 小阿賀野川、信濃川の自然堤防上に集落が形成されている 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である
<ul style="list-style-type: none"> 緑や自然と触れ合える自然と調和した公園が少ない 	→	豊かな自然を保全・再生し市民が触れ合う場所として積極的に活用する必要がある
<ul style="list-style-type: none"> 都市と農村の混住化が進んでいる 人口及び世帯数は増加の傾向が見られ、転入者も多くなっており、第2・第3次産業の従事者が増加している 地域住民のボランティア参加への意欲が低くなっている 	→	地域のコミュニティづくりを推進する

秋葉区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 総合的な計画に基づく秩序ある土地利用と、身近な緑としての農地や緑地の保全が必要とされている 町内生活道路に道路幅員が狭い箇所や歩道の整備が望まれている箇所がある 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である
<ul style="list-style-type: none"> 農家と非農家の混住などのため、農作業に対する苦情が発生しており、周辺住民に配慮した農作業の実施が求められている 	→	農村と都市の相互理解による地域づくりを推進する
<ul style="list-style-type: none"> 農村地域では、人口の減少、高齢化などによる地域の活力低下が懸念されている。地域資源を生かした農村地域の活性化が求められている 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である 地域のコミュニティづくりを推進する
<ul style="list-style-type: none"> 水稲・花木を主とする農業経営が主流である 	→	農業の持続的発展を図る 農業基盤の整備

南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 世帯数は増加傾向だが、人口は横ばいであり核家族化が進んでいる 	→	地域のコミュニティづくりを推進する
<ul style="list-style-type: none"> 下水の整備が遅れている 	→	地域住民参加による水質汚濁防止活動の推進を図る

西区住民意向調査・現況調査

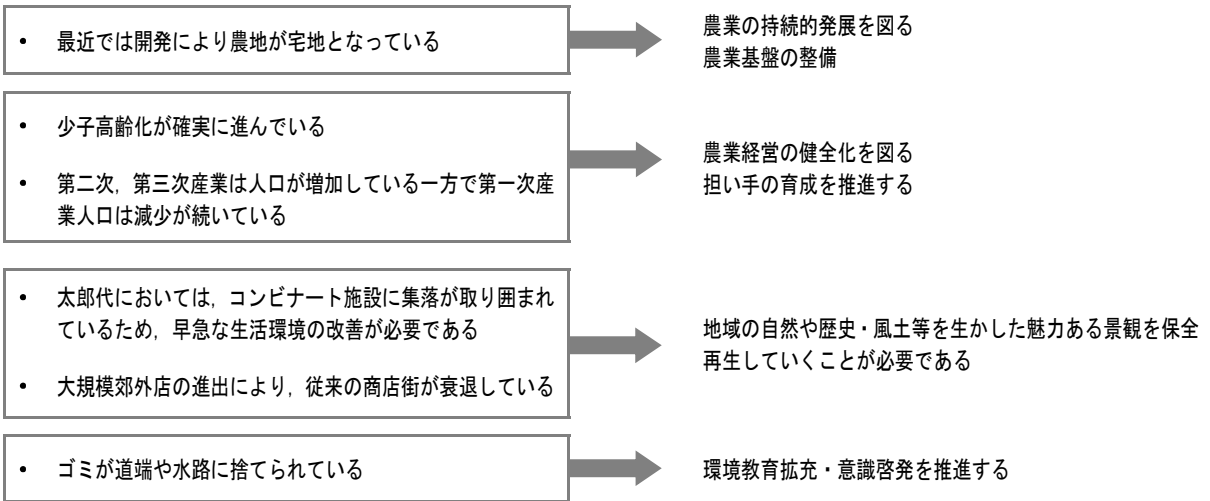
<ul style="list-style-type: none"> 赤塚地区は急速に宅地化が進んでおり、周辺環境に配慮した土地利用計画が必要である 	→	地域の自然や歴史・風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である
---	---	--

西蒲区住民意向調査・現況調査

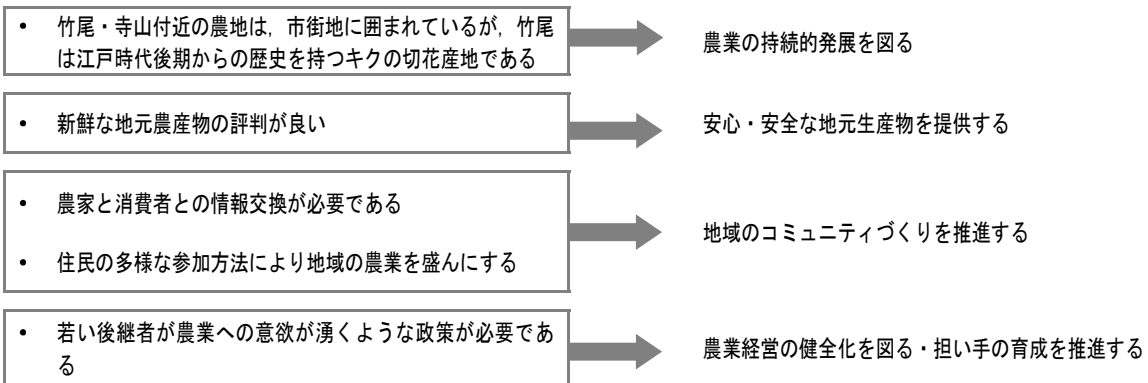
<ul style="list-style-type: none"> 自然を残しつつ、もっと活発な村にして欲しい 	→	地域の自然・歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である 地域のコミュニティづくりを推進する
<ul style="list-style-type: none"> 市町村合併等により、都市近郊のベッドタウンとしての役割が高まりつつあり、核家族化に伴う世帯数の増加による宅地開発が今後予定されており、農用地の減少が懸念される 	→	地域のコミュニティづくりを推進する 農業の持続的発展を図る
<ul style="list-style-type: none"> 都市との交流の場を求めている 近年人口の増加が停滞し、核家族化及び少子高齢化が進んでいる 	→	地域のコミュニティづくりを推進する
<ul style="list-style-type: none"> 若年人口が減少しており就業環境などの整備などが求められている 	→	農業経営の健全化を図る 担い手の育成を図る
<ul style="list-style-type: none"> ゴミの不法投棄などが問題となっている 	→	環境教育拡充・意識啓発を推進する

■ 社会環境に関する項目

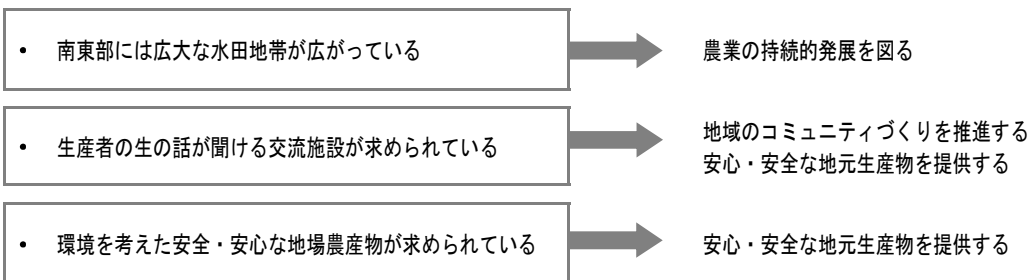
北区住民意向調査・現況調査



東区住民意向調査・現況調査



中央区住民意向調査・現況調査



江南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 清五郎排水路など、環境に配慮した水路が形成されている 	→	自然と共生する農業農村整備
<ul style="list-style-type: none"> 環境にやさしい農業(減農薬・減化学肥料)を消費者は望んでいる 	→	安心・安全な地元生産物を提供する 農業の持続的発展を図る
<ul style="list-style-type: none"> 給食や直売所等での販売による地産地消の推進や、農業体験や直売所等での交流を望んでいる 	→	地域のコミュニティづくりを推進する 安心・安全な地元生産物を提供する
<ul style="list-style-type: none"> 農家の動向として、兼業化・高齢化が続いている 	→	農業経営の健全化を図る 担い手の育成を推進する
<ul style="list-style-type: none"> 亀田の持つ梅や田園などの農村景観に魅力を感じている 	→	地域の自然や歴史や風土等を生かした魅力ある景観を保全再生していくことが必要である

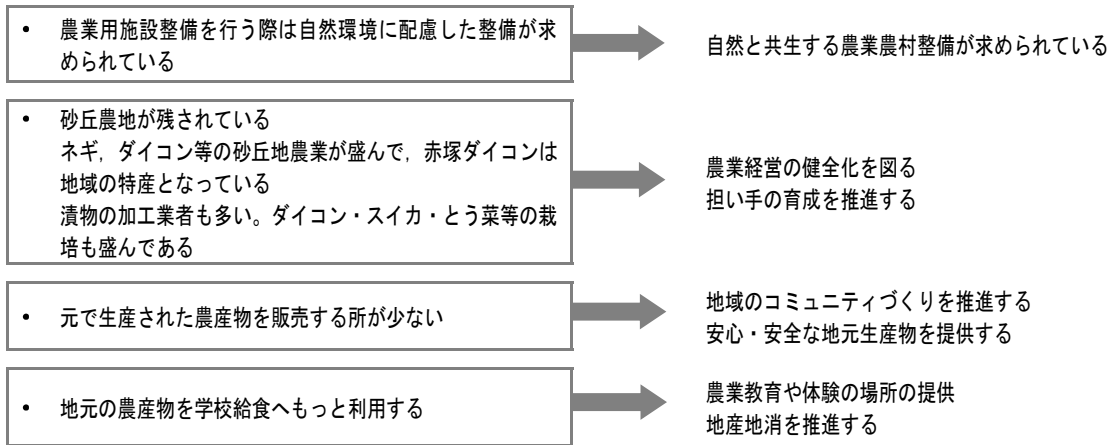
秋葉区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 高生産性農業の確立に向けた基盤整備が求められている 稲作を基幹とし、花木等の特産品の生産拡大など収益性の高い農業を推進することが必要 	→	農業の持続的発展を図る 農業基盤の整備
<ul style="list-style-type: none"> 安全・安心な農産物を生産し、消費者に提供するため、環境保全型農業の推進や適切な農作物の管理が必要とされている 	→	安心・安全な地元生産物を提供する 農業の持続的発展を図る
<ul style="list-style-type: none"> 高齢化や後継者不足を解決するため、経営体の確保・育成、新規従事者の受け入れ体制の整備、女性農業者の支援等、農業の担い手の育成が必要とされている 	→	農業経営の健全化を図る 担い手の育成を推進する
<ul style="list-style-type: none"> 農業地域の場合、生活の場と生産の場が一体となるため、調和のとれた整備が大切である 	→	地域のコミュニティづくりを推進する

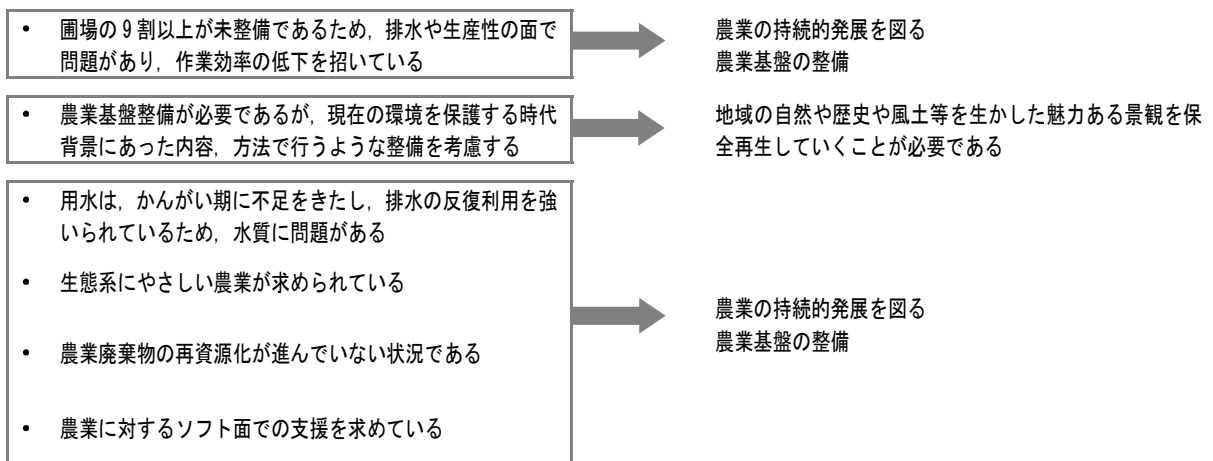
南区住民意向調査・現況調査

<ul style="list-style-type: none"> 産地直送販売路を拡大し市街地の人たちにも提供できる場の創出が求められている 	→	地域のコミュニティづくりを推進する 安心・安全な地元生産物を提供する
<ul style="list-style-type: none"> 稲作と果樹(梨)を中心とした農業経営であるが、担い手の確保と農地の集積が問題となっている 	→	農業経営の健全化を図る 担い手の育成を推進する

西区住民意向調査・現況調査



西蒲区住民意向調査・現況調査



各アンケート調査の結果から、現在の新潟市全体における環境別の課題を整理・抽出・評価し、農村環境の基本的な考え方を整理し、次章において環境保全に対する基本方針を掲げます。